

“MY TOWN” うおっちんで

歩 & 目 デス 足 ラテス

Vol.80

貴重な産業遺産・石灰窯
〈西予市明浜町高山〉

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー



岩井の石灰窯

最近、西予市のジオパーク関連が
ニュースになる事がある。そうした中
は、何故かなかなか話題になってゆか
ない物も存在する。今号では、そこに焦
点を当ててみたい。それが産業遺産と
しての石灰窯で、あまりポピュラーで
ない情報という前提で、少しその概
略から説明していこう。

宇和海に面した高山地区、ここは平成
合併前には旧明浜町の役場があった所
合併して早16年近く、その「高山」と
いう地名を持つアイデンティティも次第に薄
れていきつつある。元々は明治22年に成
立し昭和32年まで約70年間続いた村名
で、その間地域の主産業は明確に「石灰
業」であった。その頃の高山は「白い村」
あるいは「南予の新居浜」などと呼ばれた。
ではその石灰とは何ぞや。農業には不
可欠な、土壌改良や肥料として種まきや
植え付け前に散布されるのが石灰。この
他、古い町並みでよく見られる白壁は、
石灰を元とする「漆喰」で塗られている
し、学校の運動会ではトロツコの白線
を石灰（白い粉）で引き、黒板のチョーク
も石灰を固めたもの。身近な所ではそん
な感じだが、他にも医薬品や食品、ある
いは鉄鋼や化学など広範囲な用途があ
る。

その石灰を生産していたのが高山なの
だが、原料は当然石灰岩。石を焼き、灰
になるので「石灰岩」。こうした細かい
説明はお石灰、いやお節介か。ともかく、



高山湾頭風景（高山公民館蔵）
石灰焼きが盛んだった頃の様子が伺える

高山地区には石灰岩の層「秩父帯」が走
っており、高知県境の四国カルストまで西
予市を東西に横断し、そうした事がジオ
パークの基となっている。

さて、当時はただそこにあるだけの白
い岩の風景を、村の暮らしを豊かにする
きっかけになるのではないか、そう考え
た人物が居た。その名は宇都宮角治、ヒ
ントはある四国遍路からもたらされた情
報。「この石は焼けば灰になり、土佐で
は事業化している。」というもの。土佐
稲生（現南国市）に向けて高山を出発し
たのが、嘉永元（1848）年の秋。他
国で苦勞の末、三年がかりで習得し帰国。
晴れて同三（1850）年、何とか宇和
島藩の許可も得て小僧津に窯を築き、初
めて石灰を製造したとされる。

今その発祥の地には、記念碑と共に老健施設グループホームが建つ。従ってその場所に当時の窯は既に無いが、あたかもその時代を物語る初期の窯が、西方約4km宮野浦の岩井という所にある。それが冒頭の写真で、窯口が四か所、道路側（R378号）に面して並ぶ。こうした窯を徳利窯と言いい、もし透視すれば丁度内部には徳利を逆さまにした形状のものが四基並んでいるという、豎窯である。こちらの窯は、明治四（1871）年に田之浜の宇都宮家が石灰製造を始めた時の



石炭焼成時代の石灰窯群



徳利窯内部



岩井の石灰窯上部を発掘



国重文・小野田セメント徳利窯

ものと記録されているとのこと。窯口の高さは1mにも足らず、人は入れない。これは高山地区に分布する他の石灰窯群の中で、特筆すべき形状の違いである。何故なら木炭で焼成する時代の窯のサイズだからである。翌明治五年には、宇都宮長三郎が筑前若松（現北九州市）から火力の勝る煽石（揮発分の少ない石炭）を購入し、石炭焼成を始めていて、窯が大形化したらしい。つまり、今残っている窯群は、この岩井のもの以外全て石炭時代の窯なのである。なお、この時期の石炭焼成は、全国初であった事も次第に分かり始めた。

国重要文化財となっているが、この岩井の窯はもっと古い。違いはセメント生産用の煉瓦製窯であるのと木炭使用時代の石灰生産の為に石垣積み徳利窯ということ。こんな貴重な産業遺産が何の保護もされず、また文化財指定もされず、しかも現在国道378号線の改良拡幅計画の延長線上にある。他の石炭焼成時代の窯群についても、急傾斜対策工事等様々な理由背景で解体消滅が進んでいる。せめてもの事、石灰岩の段畑が広がる文化的景観が脚光を浴びつつある狩江と同様、これら高山地区の石灰窯群にもぜひ熱いまなざしが注がれることを祈るばかり。また「おせっかい」の虫がうずいている。



南国市稲生田中石灰の現役石灰窯

【注釈】参考図書
「伊予高山石灰産業史」
宇都宮長三郎・著
平成27年4月発行